法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

<巻頭言>中世文学研究の輝き ： 表章,杉本圭三郎両先生を讃えて

立石, 伯 / タテイシ, ハク / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
57
(開始ページ / Start Page)
4
(終了ページ / End Page)
6
(発行年 / Year)
1998-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019987

中世文学研究の輝き

――表章、杉本圭三郎両先生を讃えて――

立石伯

時間は意識の隙間を微妙、巧妙にぬいすすみながら、突然冷酷な事実を目の前に突きつける。個々人の感覚の上では、歴史というものが絶えずそのような謎めいた神秘的な力として立ち現れるものなのであろう。齢を重ねるにつれてその感懐は深く重い。人事の変遷にそれが一面で鋭くあらわれるようだ。そのことでいえば、今年もまた、一九二七年生れの表章先生と杉本圭三郎先生を定年退職で送ることになった。随分前から解っているはずの事実なのに、目前に迫ると、何かしら心の奥で周章狼狽する気持ちが強い。

表章先生の野上記念能楽研究所専任所員としての就任は、一九五一年七月に遡る。同年三月に東京文理大国語国文学科を卒業され、数ヶ月後の就任ということであった。二十代前半の若年の時以降四十六年以上も在職ということで、その労苦は推察にあまりある。まだ充分に整わない研究所の草創期から、着実な研究推進・発展に到るまでを両肩に担い、かつ後進を育成しつつ歩みつづけたということにほかならない。といっても先生にとっては、能楽研究所員であることは研究と新しい事実等の発見に不可欠な位置であり、日本的な範疇から国際的な拡がりへと展開してきた学問の深化と精華以外の何ものでもないはずで、在任期間の長さは慶賀すべきことに相違ない。現在大学に属する研究所は、当時組織上は文学部付置であったから、文学部の教員として、学部・大学院の教育にも同時に邁進された。学恩を受けた卒業生も多い。その中心的探求課題は、能・狂言をはじめとする古代・中世芸能や中世を

中心とする和歌・物語文学であり、近世文学にも及ぶ。その研究の成果はわざわざ注して記すまでもないほどで、深い造詣と広い視野に基づいて展開されている。諸論文や研究成果に対する外部団体からの受賞などに、その評価が端的に示されている。生産的で厳密な実証的研究がその方法である。研究所の所員でありつつ、文学部長としても大学運営に貢献されたことは、記しておくべきことであろう。

杉本圭三郎先生の文学部専任教員の就任は、六三年四月である。その年齢からして遅い感があれ、その少青年期が戦争の時代であって、戦中戦後の生活の困窮とやむをえざる就職、その中での永い学問研鑽のための刻苦勉励などの故であって、それが逆に文学研究と人間認識の深みと学問の艶を醸し出すことになっているであろう。本学の大学院博士課程日本文学専攻を六二年三月に修了されて一年後のことであり、やはりそれ以降三十四年間ほども文学部の日本文学科と大学院の日本文学専攻を中心として教育・研究、さらには文学部の運営のために奔走された。研究領域は、平家物語、太平記をはじめとする中世軍記物語・物語文学を中軸に、古代・近世文学などと幅が広い。その視野は近代文学にも及び、いわば文学の本道を歩んでこられた。その方法は着実な実証的研究を基本としつつ、文学のもっとも本質的な問題、人間論、人間精神と世界像のあり方に対する追究などを尖鋭な形で展開された。言葉と表現された世界に対する感覚が鋭いのは刮目すべきで、その一成果が平家物語の現代語訳によく示されている。創造・研究はまず書物を読むこと、前代の優れた人々の跡を丁寧に追尋することであるが、その道をひたすらに歩まれた。その一端が稀代の蔵書家であること、その書籍の質量は瞠目すべき点に示されている。汗牛充棟の形容も及ばないほどである。他の芸術領域への高度な趣味も特筆すべきものである。

両先生は、学問研究の高度な水準とその為人において、属されていた中世文学会をはじめとする諸学会には今後も所属し、大いに活躍され、後進の指導にも力を揮われることは、ここでわざわざ断るまでもないことであろう。学会をはじめとしてさまざまな会合で、厳しい研究・学問上の遣り取りをされていた両先生の姿や真摯な態度が、今、眼前に髣髴とする。学問に精進すること、そして何よりも書物を読むこと、第一次資料などを綿密に調査するこ

と、微細なことをも徹底的に調べつくすことの好きな方々であったという印象が強い。よい意味で明治・大正期に生れた碩学達の精神を継承している趣がある。今一度、七十歳古稀にして初心にかえられ、歩一歩とさらにその学問の領域が拡大深化するであろうことは、足の遅い私たちですら遠望していて楽しみである。

個人の学問や研究の領域においては相変らず着実であっても、本大学、学部や学科に対してはこれまでと異って、その係わり方にいささか距離や疎隔が生じるであろう。両先生ともそれぞれおかれた位置にしたがってこれまで大いに貢献され、きわめて有為な人材であったために、私たちにとっては大きな主柱を失ってしまった塩梅で、その不在は残念至極のことである。つまり、日本文学科は、同時に二人の中世文学・芸能研究の泰斗を教授として失い、さらに優れた文学の認識者・人生の先導者をなくしてしまうことにほかならないのである。極論すれば、文学・文芸が来世紀においても存続するか否か、危ぶまれつづけて久しい。創造・研究における危機的な厳しい条件に直面し、古典にしても近・現代にしても、テーマ的な問題や研究のスタイルや方法的な探求のありようなどがさらに徹底的に省察されなければならない新たな時代であろう。越えがたい学問・芸術の大きな難所にかかっている時期であるために、両先生を送ることは、大きな損失である。このことは現在よりも、もう少し時が経つとずっと無念の思いをこめて実感されることに相違ない。

大学・学部・学科をふくめて、現在教学上・組織上の根本的な改革期に突入している。その時期に両先生をもって日本文学科の教員の世代交代が一巡した趣がある。小田切秀雄、広末保、益田勝実、外間守善などきわめて優れた学者・研究者・評論家であった諸先生の次の世代の教授陣にほかならない。そのような状態で、まだお元気で壮年の華を漂わせていらっしゃる両先生を無念の気持ちで送らざるを得ないが、私たちは同時に心からのお礼を述べ、さらにまた私たちに対する教示を授けつづけて頂きたいとお願いもしなければなるまい。幸いなことに、杉本先生は国文学会の会長であり、表先生も能楽研究所にとっては貴重な無二の先達である。心強いばかりで、再度、温かく見守ってくださいと要望しつつ、両先生のさらなる健康と一層の研究の深化を祈るのみである。

（たていし　はく・文学部教授）